



第17号
2012. 3.

青少年赤十字
賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条
1. 青少年十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団
事務局 日本赤十字社広島県支部

〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
TEL (082) 545-5011

平成二十三年全国青少年赤十字
賛助奉仕団協議会総会報告

委員長 日高敬司

平成二十三年七月七・八日に日本赤十字社本社で開催されました。

○第一日

- 一 開会式、オリエンテーション、写真撮影
- 二 協議会総会

- ① 平成二十二年度事業報告、会計報告、監査報告
- ② 役員改選
- ③ 平成二十三年度事業計画、予算
- ④ 創立五十周年記念事業（平成二十六年）
（平成二十六年に記念行事を持つために、東京都支部の方々を中心に様々な企画が考えられています。）

○第二日

- 一 講演 「東日本大震災における救護活動について」
日本赤十字社医療センター
国内医療救援部長 丸山嘉一
- 二 DVD 「東日本大震災く被災地での四十日間」視聴
- 三 証言 東日本大震災（岩手・宮城・福島）の会員から、生々しい報告がされました。）
- 四 ブロック会報告
- 五 全体討議
- 六 閉会式

中四国ブロック青少年赤十字
賛助奉仕団研修会報告

副委員長 野田 崇

十月一三日・一四日に岡山市でJRC賛助奉仕団第五ブロック研修会が開かれ、中国・四国九県から代表が集まり、JRCの活性化を課題として各県の現状について、情報交換と意見交換を行いました。

広島県からは、日高委員長・野田副委員長の二名が参加しました。二名は乗用車にて朝九時に支部を出発し山陽自動車道を経由して岡山に着きました。

- 第一日
- 一 開会行事
- 二 秋田日赤看護大学の井上忠男教授（元本社青少年赤十字課長）の講演
井上教授の青少年赤十字に寄せる期待の大き

た。

- 第二日 岡山史跡探訪
- 探訪1 古代山城・国指定史跡「鬼ノ城」
案内 総社市教育委員会文化課課長補佐 探訪2 吉備津神社
- 昼食後、来年の再会を期待しつつ広島に帰りました。来年は、香川県開催です。平成二十五年は広島開催となります。（準備視察のため、来年度は支部を含め多くの参加が必要です。）

青少年赤十字加盟校の声

顧問 曾山和彦

私が日本赤十字社広島県支部に赴任した平成十二年には、幼稚園から高等学校までの加盟校八十三校、七千四百人余りの参加で、全国的には最下位から三番目という状況でしたが、賛助会員や県支部のご努力のお陰で、二十三年には三百九十四校、十二万二千人を超えるメンバーの参加をいただき、全国的に見ても県勢順位（十一位）並にという大躍進を達成することができました。
これを契機として、加盟校の現場の声を伺い今後の参考とさせていただくため、加盟校を対象に昨年度アンケート調査を実施させていただきました。その概要について報告させていただきます。調査に協力いただいたのは、全体の一割程度でしたが、参考となる項目が数多くありましたので紹介します。

まず、加盟の動機ですが、「県支部の各種講習

さを改めて感じました。

三 実践発表

- ① 「東日本大震災救護ボランティア活動を体験して」岡山県支部機動奉仕団委員長
- ② 「気づき考え実行する 生徒の育成をめざして」倉敷市立真備東中学校教諭
- ③ 「JRC卒業生『私たちの活動』」就実短期大学学生
岡山県JRC加盟校二校（中学校・高等学校）とJRC卒業生の実践発表（活発に活動する岡山県の実態が理解できました。）

四 連絡協議会

- ① トレーニングセンターの支援活動について
- ★ トレーニングセンターの参加者の減少や指導スタッフ不足に苦悩している（鳥取・徳島・広島）
- ② 賛助奉仕団組織強化並びに活性化について
- ★ 賛助奉仕団の高齢化に伴う活動の停滞に悩む（鳥取・高知・徳島・広島）
- ③ JRC加盟促進及び団員研修について
- ④ 各加盟校（幼・小・中・高）の活動充実に
- ⑤ ついて
- その他 意見交換しました。

★学校多忙化による加盟促進の停滞・高齢化による研修会の不参加（島根・岡山）
★子どもの発達段階において心の連携を積み重ねながら「生きる力」を身につけさせたい。（香川・高知・愛媛）

最終的には支部や地域奉仕団との連携、他奉仕団の協力などにより、より活発な活動充実を確認しました。

夜の懇親会では下津井音頭のもてなしを受まし

（閉会式の際、近衛忠輝日赤社長の挨拶があった）

★今回の会議では、東日本大震災に際して赤字の果たしている役割の大きさを感じました。また、被災現地から来られた会員もおられ、臨場感ある報告を聞き、平日頃の備えやボランティアのあり方などを学びました。そして、我々が会議をしている隣の部屋では、東日本大震災のためボランティアの方々が支援のための事務処理、手配 などのを行っているのを目の当たりにしました。）

会を優先的に実施してもらえ」、「赤十字の活動が自校の教育目標の実現に役立つと思った」が圧倒的に多く、次いで「以前から加盟していたから」の順となりました。

次に、JRC活動に対する要望や実施してもらいたいことについては、意見は少なく「身近な怪我や事故などへの対処法の講習の実施」、「他県・他校の活動の紹介や本県支部の支援策の紹介」、「役立ち協力できる情報の提供」等でした。

このような調査結果を踏まえ、青少年赤十字活動への加盟の促進を図るためには、

- ① 救急法など日常生活で遭遇する事故等に対処できる講習会等を可能な限り学校を会場にして実施すること。
- ② 県支部が保有する青少年赤十字の活動に係る資料等の情報を可能な限り加盟校等に提供してもらうこと。
- ③ 広島県内における赤十字関係の他の奉仕団（例えば、安全奉仕団等）や関係団体等との連携を強化し情報の交換や各種活動への相乗りなどを通じてお互いの連携を強化すること。

等に積極的に取り組む必要があります。

最後になりましたが、今回のアンケート調査の詳細な内容を必要とされる方は、日本赤十字社広島県支部組織振興課に連絡いただければ、資料を送付させていただきます。

二〇一一年夏 三・一から 五ヶ月の東北・福島県を訪ねて

副委員長 野田 崇

今年の夏、インターハイ（全国高等学校総合体育大会）アーチェリー競技が青森県八戸市で開かれ前任校である県立広島工業高校が出場することとなった。その応援の帰りに東北地方を訪ねてみると、日程を福島県の「磐梯青年交流の家」で開催されていた青少年赤十字指導者研修会（八月一〇日～一二日）に合わせ、八月八日夜行バスで出発した。福島県支部には、毎年三月末に山中湖で開かれる高等学校JRCスタディセンタースタッフを長年共にした、いわき市のT・T先生を紹介して了解を得ておいた。

インターハイ競技の途中であつたが、十一日朝、指導者研修会に参加するため、会津・猪苗代に向かった。新幹線の車窓からは、地震の爪痕は屋根のブルーシートを見るだけだった。午後福島県の青少年赤十字指導者研修会に合流した。

参加者は、三十五名・スタッフ十二名計四七名の研修会であつた。広島の研修会と異なるプログラムもあり、興味・関心を持てる内容だった。私から地震のことを切り出して、聞くことはできなかった。夜、参加者による懇親交流会に参加

させてもらった。八月十一日が大地震・大津波・原発事故五ヶ月のこともあつて、誰からともなく体験を語り始められた。大津波・原発事故の直接体験者はおられなかったが、生の貴重な話をお聞きた。

「四月一日浜通りの大津波被害を受けた小学校

『青少年赤十字展』開催 ～東広島市生涯学習フェスティバル に協賛して～

顧問 横田二郎

平成二十三年十一月五日（土）六日（日）、東広島運動公園体育館において行われた「第二十一回東広島市生涯学習フェスティバル」に広島青少年赤十字賛助団として参加し、『青少年赤十字展』を開催しました。

「気づき、考え、実行する」の生活態度目標と「健康安全」「奉仕」「国際理解・親善」の実践目標のもとに、具体的な活動を続けている『青少年赤十字』について紹介し、地域の諸団体・住民の方々からの理解と連携・協働を期待して実施しました。

展示等の内容は

- ★「赤十字とは」（パネル展示）
- ★「青少年赤十字の章彰」（団旗展示）
- ★「青少年赤十字―赤十字の活動に参加したい―」（パネル展示）
- ★「青少年赤十字の目標・ちかい」（展示、資料に掲載）
- ★「東広島市内JRC加盟校紹介」（展示、資料に掲載）
- ★「青少年赤十字・永年加盟表彰校の紹介」（表彰楯とともに展示、資料に掲載）
- ★「西条農業高校JRC活動報告」（「JRCって？」「エコキャップキャンペーン」展示、エコキャップ回収箱設置）
- ★「河内高校JRC活動報告」（「環境美化活動」

に転勤になった。被災地に着任して息をのんだ」「原発事故避難が始まって政府は、健康に直接影響はないと発表していたが、二十五ミリシーベルトの高濃度放射線のなか、郡山市でスーパールの行列に並んでいたことを後で知った」

「生徒・児童のなかに家族・友人を亡くした者がいる。トラウマに対してフォローが大切」「大津波・原発事故で家族が離ればなれで生活を余儀なくされている子どもがいる」

「六月末、放射能飛散で教室の窓を閉めて授業をしていたら生徒が、『熱中症で死にたくない窓を開ける!』という」

「子どもたちは余震に怯えながらも、震度三や四なら、『今のは小さいね』という」

そして、「子どもたちがいる、わたしたちが逃げるわけに行かない」など、大震災・大津波・原発事故・六月豪雨災害と四重の困難に襲われた福島の実情と先生方の思いと覚悟を知ることができた。十二日研修会閉会式で挨拶を求めたので、「大震災・大津波・原発事故の困難な状況にありながら、青少年赤十字指導者研修会に三五名の参加に、福島県の底力に感銘しました。広島も原爆により放射能被害を長年受けてきたが、原発事故による放射能被害の経験はありません。広島を取り組みは参考にならないかもしれませんが、今後とも関心を寄せるとともに連帯したいと思います」と話した。

十三日福島第一原発を迂回し、浜通り北部、松川浦・新川町の津波被害を見て帰広した。

「環境清掃活動」展示）

★「JRCと私―大海の一滴になろう」

黒瀬高校卒業生・中山優也さん（資料に掲載）

★「青少年赤十字トレーニング・センターに参加して―終えての課題―」

賀茂高校生徒会・有村瑞穂さん（資料に掲載）

★「青少年赤十字賛助奉仕団の紹介」（資料に掲載）

この催事当日は、天候に恵まれず、例年に比して参加者は少なかったが、第一日九、八五〇名、第二日七、七五〇名、合計一七、六〇〇名の参加がありました。

この催事の実施に当たっては、JRC加盟校、東広島市教育委員会、日本赤十字社広島県支部、日本赤十字社広島県支部東広島市地区、東広島市赤十字奉仕団、安芸津町女性赤十字奉仕団等のご協力を得ましたことをありがたく、心から感謝いたします。

今後とも、これらご協力をいただいた諸機関・団体とともに、地域における青少年赤十字の健全育成と赤十字活動の充実・推進のため、より具体的な連携・協働の態勢作りに努めていきたいものと思っております。

平和の象徴「折り鶴」の誕生と 青少年赤十字

～サダコさんのもとに届いた

千羽鶴～

監事 恵美男作



平和記念公園のボランディア・ガイドを初めて早や四年目になります。「原爆の子の像」はご存じだと思いますが、折り鶴を掲げて立つブロンズ像はサダコさんをモデルにしたと言われています。サダコさんは病気を治したい一心で千羽鶴を折り続けました。その一部は平和記念資料館に展示してあります。サダコさんと「折り鶴」のことを調べていくと、JRCが関与していることが判りました。

以下紹介させていただきます。

- ① 名古屋の私立女子高、愛知淑徳高校JRCメンバーの送った「折り鶴」に始まります。
- ② きっかけは、一九五五（昭和三十）年七月、雑誌「高校時代」中の映画「無限の瞳」の紹介記事を見たことに始まった。この映画は、被爆した高校生を救おうと訴えたもので五月に完成しています。
- ③ この記事を見て、JRCメンバーは話し合いをしました。「九年たっても原爆症で倒れる人があるんだね」「被爆者の方々はお気の毒」「何かお慰めできることはないか」「広島の日赤病院に何かお見舞いを送ったらどうか」「何がいか」「八月六日に間に合うものを」「千羽鶴を送ったらどうか」↓「淑徳高校JRC千羽鶴作戦が始まる」↓「日赤愛知県支部を通して日赤広島県支部に送られる。四千羽、一九五五年八月三日に到着」↓「一部が入院中の佐々木偵子さんに届けられる」
- ④ 佐々木偵子さんは自分の病気を治したい一心で「折り鶴」を折っていった。八月中に千羽織り終わっていました。しかし、病気は治らず二千羽を目指して折っていきます。その折り鶴は小さくなっていきました。三百羽あまり折ったところで

亡くなりました。

⑤ 偵子さんは世界平和については何も語っていませんが、翻訳本などでは「鶴の羽に『平和』と書こう。そうすれば、鶴は世界に飛んでいくでしょう」と語らせている。語らせていく間に「折り鶴」は平和のシンボルとなっていました。

⑥ 二〇〇九（平成二十一）年七月十八日、偵子さんのお兄さん（雅弘さん）、「折り鶴」の贈り主と五十年越しの対面、当時のJRCの部長だった高橋登代子さんも七十代、対面の前日「私たちが蒔いた小さなタネがこんなに広がって驚いています。こんな喜びを与えて貰ったことへの感謝の思いを伝えたい」。兄雅弘さんも「偵子の鶴を折るきっかけをくださったことにお礼を申し上げたい」と話されています。

まとめ 広島は平和の聖地です。地元JRCは活動として、平和を願う活動を何か考えられないか・・・と思っています。

（中学校実践報告） 『HUMANITY・絆・2012世界』

吉島中学校前生徒会長 草薙由愛

「HUMANITY（人道）」・・・私の通う吉島中学校の、学び舎のあちこちで目にする言葉。昨年10月、大阪府の阪南市立桃の木台小学校の6年生の皆さんを、この吉島デルタにお迎えし「人道交流令」を行いました。平和公園と一緒に巡り思いを交わす中、いつしか私たちと小学生の皆

さんは同じ目線に立って、平和や人道について共に考えていました。これは学校で、EHL（『人道法の探求』）学習のときにも実は感じていたものです。「人間の命と尊厳」の大切さを熱く語る先生の目線は、確かに私たちと同じ位置にありました。「人道によってつながれた『絆』」。それは昨年冬、韓国RCYのメンバーと指導者の先生方の一三名を本校にお迎えし行った「人道交流令」、その時のRCY李泰煥先生の言葉。

この出会いから二ヶ月を待たずして起こった災害は、私たちの国を、深い悲しみと治まらぬ動揺で覆い尽くしていきました。ポスターや貯金箱造り、必死の呼びかけと共に始めた募金活動。その中に見た、仲間や先生方の今までにない積極的な協力の姿、そして確かな『絆』の感触。心の中で思っていること、願っていることはみんな同じなのだということに気づかれました。また、世界各国から寄せられた支援の大きさに、人々の温かいまなざしを感じました。

今、私たちの学校は、こうした活動を通して、青少年赤十字の目指す生徒像である「気づき、考え、実行する」力を身につけ始めています。また、全校で取り組んでいる国際人道法学習EHLは、人間の命と尊厳について常に問い、改めて人道的な観点から身近な問題や世界の諸問題を見つめ直す機会となっています。

今は若く幼い私たちですが、やがて自国の文化や歴史を担い、社会を背負って行かなければなりません。私は、遠い未来へ携えていくべき限られた荷の中に、「HUMANITY」を忘れないようにしたい。

私たちが暮らす郷土・広島は、人類最初の被爆

の地。ヒロシマに生きる私たちだからこそ、今「HUMANITY」、すなわち赤十字の『人道・博愛の精神』を、しっかりと汲み取り受けとめ、理解し、全世界に向けて発信していくことが大切だと思います。

（中学校実践報告） つながる心 〜できることから一歩一歩〜

廿日市市立四季が丘中学校

三月十一日の大震災からもうすぐ一年が経過しようとしています。「今の自分たちに何ができるか」今年度の四季が丘中学校生徒会のJRC活動は、この大震災が活動について深く考えるターニングポイントとなりました。

「誰もがまわりの人と支え合って生活しているからこそ、人のために行動しよう。」「生徒一人ひとりがお互いに思いやり、心をつなげて行こう。」「そんな思いから『つながる心』自信を持って一歩一歩〜』という生徒会スローガンを掲げて活動してきました。

これらの活動の中から二つのことを紹介させていただきます。

まず、震災に関する活動です。震災の発生を受け、三月末に募金活動を行うとともに、六月には木のまち廿日市市にちなんで、生徒一人ひとりが木片を加工して作った手作りキーホルダーにメッセージを添えて気仙沼市の中学校に送る活動に全校生徒で取り組みました。また、十月には、執行

（会員だより） 先輩を訪ねて

副委員長 河戸靖子

「あ！なでしこジャパン」教室の中に子どもたちの声が響く。俳句教室の小学生の歌声だ。私はここ数年、青少年赤十字加盟校（安芸郡熊野町や東広島市）で「子ども俳句と俳画」の指導をさせていただいている。俳句は日本の伝統文化の一つであり、近年、小学校でも高学年から中学年へと教科書に示されてきている。五七五の定型に季語を詠み込むと同時に、家族・地域の方々の暖かさ、優しさに子どもたちが気づいて俳句ができるよう指導している。すなわち、青少年赤十字「誓いのことば」の中にある「郷土・社会のために、国家と世界のために尽くすことを誓います」の意味を知り、行動とともに培ってほしいと願うからである。どちらの学校でも、子どもたちは、知識としての花鳥風月を愛する俳句であったものから、祖父母や家族の愛情、郷土の方々の悲しみに対して、自分の気持ちを詠む俳句に変化してきている。

例えば、

○鰻ごはんスプーンによそい祖父母に

○ウインカー祖父がつけたらまた蛭

○手ぬぐいで汗ふく祖母が秋刀魚焼く

○父が釣る竿の先に鮎光る

○水運ぶ稲刈りしている父さんに 等である。

併せて持参した季節の植物か、花々の名前を子どもたちと覚える。例えば、「萩」「ききょう」「くず」等であるが、「これ撫子」と花を見せたとき、異口同音に「なでしこジャパン」と叫んだ

部が呼びかけていわき市の小学校三校に応援メッセージを色紙にまとめて送りました。キーホルダーや色紙を贈った学校からはお礼のメッセージが届き、被災地の生徒のたくましさから元気をもらっています。

次にSC活動についてご紹介します。このSC活動とは校内ボランティア活動のことで、普段はなかなか手が届きにくい場所を自ら見つけ出して、清掃するものです。二期には月に一回ずつ行い、トイレや廊下の窓などを中心に行いました。トイレ掃除では、一人が一個の便器を受け持ち、丁寧に雑巾で磨きあげます。全校生徒の半数が自主的に参加し、達成感や連帯感などを感じてくれています。

四季が丘中学校のJRC活動はまだまだ発展途上だと思っています。生徒一人ひとりの思いをつなげ、気づき、考え、実行することを進めて行きたいと考えています。

（会員だより） 青少年赤十字賛助奉仕団の一員として

副委員長 大木 昭

青少年赤十字にご縁を頂いて四十余年、私の半生以上を赤十字にかかわる仕事をさせていただいております。

現職を退いて二十年、引続き賛助奉仕団、アマチュア無線赤十字奉仕団に所属しています。

地域にあつては地区社会福祉協議会、学区献血

のだった。ここまでサッカーが浸透しているのか、と感心して担任の先生と顔を見合わせて笑ったものだ。

こうして、完成させた俳画は青少年赤十字活動の一環として、一人暮らしの老人へ贈る弁当の表紙にしていたいたり、縮小して「しおり」にして施設訪問の時プレゼントにして活用していただいたりしている。お役に立てていただいて大変喜んでい

これらの青少年赤十字加盟校からの帰途に、私たちの先輩森田寛先生をお訪ねすることになっている。既に訪問を初めて四年になる。昨日も「熊野町青少年赤十字祭り」の帰途報告に伺った。

八十八歳の森田先生は、御不自由な手で私の手を強く握りしめ、「賛助奉仕団の先生方に『頑張ってください』と伝えてくれたまえ」とおっしゃった。

同じ日に熊野町の青少年赤十字祭りでお目にかかった光本涼子先生からも「主人からも『皆様にくれぐれもよろしくと申し上げてくれ』と言いつかってきたの」とおっしゃってくださった。

さらに私は、庄原市比和町の小学校へ俳画の指導に行った帰り、九十歳の田中光枝先生のお宅へもお話を聞きに伺っている。田中先生のお宅では二人で「空は世界へ」を歌ったり、トレセンの報告を聞いていただいたりする。そのとき教えていただいたことは、

「先輩である私たちの役目は、後から来られる方々のために、誰でも歩けるように細くても小さくてもいいから道を作っておいてあげることではないかしら」と。おっしゃった笑顔と手のぬくもりに、胸に熱いものがこみ上げてきました。

平成二十三年度 青少年赤十字賛助奉仕団総会報告

青少年赤十字広島県大会が十月二十二日に日本赤十字広島看護大学で行われました。この大会終了後、会場の一室にて今年度賛助奉仕団総会を行いました。総会資料説明後、議題として次のようなことを話し合いました。

一 会計から

毎年度、残高を食いつぶしながら、年度遅れの団費徴収では、会計が賄えない状況があることを報告し意見を求めました。その結果、今年度は団費請求を早め、独自に請求することになりました。（今までは機関紙送付の折りに同封していましたが、今年度は既に十一月初旬に各団員宛に団費納入のお願いと振込用紙を同封して送っています。）

二 奉仕団活動の活性化に関する事項

- ① 広島県内における青少年赤十字活動に関するアンケート調査結果から（賛助奉仕団の果たす役割について）
- ② 東広島市生涯学習フェスティバルでの青少年赤十字展報告
- ③ 昨年度実施した県内の各奉仕団体との合同研修会「広島県赤十字ボランティア研修会」を今年度も企画する。
- ④ JRC加盟校登録式の積極的関わり。

（賛助団員が加盟校登録式に立ち会い、挨拶をしているが、今後も活動の一環として大いに推奨したい。）

以上が主な話し合い内容でしたが、今年度は新たに入団された方もあり、活気を帯びたものになりました。JRC県大会では素晴らしい発表が数

（会員だより）

青少年赤十字賛助奉仕団に加入して

副委員長 山中 章敬

青少年赤十字と関わって三九年になります。最初に赴任した学校が全校加盟の学校でたまたま赤十字委員会の担当者がいないということがきつかけでした。その後、分掌が変わっても、学校を変わっても、未加盟校に転動しても青少年赤十字に関わらせていただきました。未加盟校の中には、県のトレーニングセンターに参加した生徒から「加盟をさせて欲しい」ということから青少年赤十字に加盟したこともありました。今年三月に退職してから、青少年赤十字賛助奉仕団に加入させていただき、引き続き青少年赤十字に関わらせてもらっています。

賛助奉仕団の一員として青少年赤十字をますます活発にしたいと思っています。幸いここ数年で加盟校は、保育園・幼稚園から高校まで三九三校にまで増加し、中学校は九八校を数えるまでにになりました。中学校の三校に一校以上は加盟校です。数年前の中学校の加盟校は一〇校あまりの状況でしたからその増加状況は目を見張るものがあります。本当に喜ばしいことです。

急激に加盟校が増加したことは、多くの先生や生徒に青少年赤十字をより理解して貰えるチャンスと思っています。加盟校には、赤十字のいろいろな情報や、活動の機会を得ることがいくらでも出来ます。それらを活用することにより各校の教育目標達成のために大きな力にもすることができ

多くあり、その活動の様子を紹介してゆくのも賛助団の役割ではないかとのご意見もあり、盛り上がった総会でした。

平成二十二年 度 青少年赤十字 概況（加盟校・加盟率）

平成二十三年三月三十一日現在

○青少年赤十字加盟校数

全国（単位：園、所、校）	
校種	加盟校数
幼稚園	719
保育所	637
小学校	6,281
中学校	3,051
高等学校	1,783
特別支援学校	86
合計	12,557

広島県（単位：園、所、校）	
校種	加盟校数
幼稚園	9
保育所	42
小学校	183
中学校	94
高等学校	54
特別支援学校	6
合計	388

○青少年赤十字加盟率（単位：校、％）

区分	学校数	加盟校数	加盟率
全国平均	38,969	11,201	28.7
広島県	1,003	337	33.6

役員紹介

顧問

曾山 和彦
森田 寛
田中 博
田中 光枝
塚本 晃史

ます。加盟校には、青少年赤十字をより理解して、各校の教育活動にどんどん活用をして教育目標達成のために活用してもらいたいと思っています。活用のないところには、青少年赤十字による大きな教育効果は望めません。

そこで、私は、青少年赤十字賛助奉仕団の一員として青少年赤十字を少しでも理解して貰うため、自分の経験を活かし活動しようと思っています。

今年度は、何校かの中学校の青少年赤十字の登録式に行き生徒に青少年赤十字に関する話をしました。登録することで、一人ひとりが青少年赤十字の一員として改めて青少年赤十字を意識し、赤十字の精神のもとに主体的に生活や行動することが大切だということをお話しました。また、世界には一八六ヶ国に赤十字社・赤新月社があり、多くの赤十字の仲間が、その世界最大のネットワークの中で、それぞれの国・地域や学校でニーズに応じた自分たちにできる具体的な活動を頑張っていることなどを紹介しました。あなたたちも青少年赤十字の一員として、身の回りや世界のことを考え、赤十字の精神をもとに、いろいろなことに「気づき、考え、実行しよう」とお話をしました。

これからも、機会があるごとに学校に出向き、先生や生徒に青少年赤十字を知ってもらうことや具体的な活動の方法など知っていることから微力ながらお手伝いしようと考えています。どうかよろしく願います。

横田 二郎
平越 幸男
日高 敬司

委員長

射場 利久男

副委員長

大木 昭

蔭山 龍児

光本 涼子

河戸 靖子

水野 善親

野田 崇

山中 章敬

幹事長

采谷 宣子

監事

恵美 勇作

門田 脩三

編集後記

「賛助ひろしま」第十七号をお届けします。今回は東日本大震災に関連した記事もあり、盛りだくさんの原稿が集まりました。できるだけ団員の皆様の声をお届けしたいとの思いで編集にあたらせていただきました。「会員だより」もその一環です。本紙についてのご意見、お気付きがありましたら、お知らせ下さい幸いです。なお、今回も予算節減のため、手作りの編集印刷となり、不行き届きの面があるかと思いますが、悪しからずご容赦ください。